

ヒーローとは一種の狂人である

はせがわわわわ

転移という勝ち組強個性の俺は、雄英高校に受かった。

やったね。後はエリート街道を真っ直ぐ進んで良い感じにサイドキックになるう。

そう思ったが、雄英高校は、いや、ヒーローはイカれてた。

プルスウルトラ？自己犠牲？

なんで他人のために俺が危険に晒されなきゃならねえんだよ。

いや、ヒーローってビジネスだろ？

強い奴が弱い奴を守るかわりに金を貰う。

これで合ってる筈だ。

それは別に自己犠牲とやらの理由にはならないし、少なくとも他人から強制的、ではなくとも頼まれて行う自己犠牲なんてただの犠牲だ。生贄とも言える。

そんなもにはなりたくない。

プルスウルトラ？それは余裕がない奴がすれば良い。

俺は俺にできることしかやらない。

勿論訓練や個性伸ばしなどの努力はする。することによってプルスウルトラする

必要がないほど強くなれば良いんだ。

だから、お願いだから俺を雄英色に染めないでくれ。



# 目次

強固性マン

逃げ足に自信あり

転移を使ったヒットアンドアウェイ(笑)

彼のコンビニ感覚は信用できない。

氏ね！この性悪白髪野郎め!!

タグに書きちゃったからね。もう引き返せないね。



## 強固性マン

ーこの調子なら行けそうだな。

自分の足下でから聞こえる機械が壊れる独特な音に手応えを感じながら、そんなことを考える。

今日は雄英高校入試当日だ。

空は晴れ、風も無く、実技をやるには調度いい日だ。

身体のコンディションも完璧。

プレセントマイクがいきなりスタート合図を出したのには反応できなかったものの、周りの奴らとは結構な差を付けて行動ができています。

あ、挨拶遅れてすいません。俺は神出鬼火都かみできびと。ヒーロー名までもう決めてあるくらいに将来ヒーローになると決めているヒーローの卵だ。

そのためにはまずはここ雄英高校に受からなければ。

「うひょー。皆やってるなあ」

近くのビルの上に転移して、そう呟く。

これが俺の個性。全くもってそのまんまで、名づけ親の医者 of センスを疑う個性名。「ワープ」だ。

ありがちな強個性ランキング上位に入るこの個性だが、俺のは普通のとちよっと違う。

まず、個性発動条件は無いが、転移できる場所は1度行ったことのある場所か、その時自分の目に映っている場所に限られる。

まあこれは普通と言って良いだろう。

…ビルの屋上にある手すりに足をかける。

次に、個性によって移動できるのは自分の身体だけ。ただし7日以上身につけているものは自分の身体と認識できる。

まあこれも普通と言って良い。というか弱点だ。

だが、これだけの個性で雄英高校ヒーロー科に受かる自信がある訳では無い。もちろん、普通の転移系個性と違う点がある。

…そして俺は、大きく屈伸をして…跳んだ。

最後だ。この個性、どうやら律儀にも物理法則を守ってくれるらしい。物を作る

系の個性のお陰で質量保存の法則が涙目の個性社会では珍しい。

理科のテストで質量保存の法則関連の問題が出た時、「※ただし個性は考えないものとする」なんて注意書きがあるくらいだ。

その点俺の個性はきっちり慣性の法則が適応される。

…つまり、こんな感じでビルから自由落下して、地面につく直前で個性を発動して、機械敵の真横に転移すれば。

「俺式ライダーキック!!」

速度を保ったまま敵を蹴れる。

この個性、転移する際に運動の向きを変えられる。棒立ちの状態でビルから落ちて、転移する際に身体の向きを90度動かせば、地面と水平方向に落ちることができなのだ。

重力の加速度は  $9.8\text{m/s}^2$ 。1秒で約  $10\text{m/s}$  加速できる。

1秒で10m進めるわけだから、1秒落ちるだけでももう既にボルト並。

まあ要は凄い強い力を得られるってことだ。

本当ならたとえ運動の向きを変えた所で機械敵ごと俺まで大怪我をする、どころ

か赤い花を咲かせちゃうところだが、落下系のダメージに耐性がついているからへっちゃらだ。

これはなんとも不思議だが、炎を出す個性が自然と熱耐性を持つように、俺も自然と落下耐性を持っているのだと考察している。…どうでもいいか。それより今は入試だ。

3p 敵だったからか他の敵よりしぶとく、破壊しきれなかった機械敵にトドメを刺すべくもう一度転移を発動し、自分の身体の頭から足の向きにかかっている力が無くならないうちにもう一度ライダーキックをかます。

因みに上からじゃなくて横からなのは自分の身体にかかる負担を少しでも減らすためだ。

落下耐性があるにしても完全に平気なわけではないのだ。

で、更に視界に入った別の敵に転移し、ライダーキックし、壊す。

速度が失われたらそこら辺の空に転移してまた加速をする。

そう。別にビルから落ちる意味なんてない。目に入るところならどこでも良いんだから。

もうちょっと早く気づけば良かった。そこら辺も合否に関わるんだろうか。「判断力」みたいにな。

ん？ちょっとまで。もし「判断力」が診断されるなら他にも色々評価されるんじゃないか？

…まあやめとこう。変に勘繰って落ちたらたまつたもんじゃない。

それからもずっとこの調子でノンストップで動き回る。

動き回るっていつでも俺はただ棒立ちしてるだけだけどねッ！

…だんだん敵減ってきたな。そこそこ移動を挟まないと敵を見つけれなくなってきた。

まあ俺の個性なら移動時間ほぼ0だけど。

いやぁー転移個性はやっぱり勝ち組だわー。父さん母さんありがとう。

というかマジで楽勝やな。乱獲とはこのことか。

あれれー？良いんですかー？敵P俺が全部取っちゃいますよー？

俺がそんな風に調子に乗っていた時。アイツが現れた。

マリオで言うところのドッスン。

RPG系のゲームで言うところの遭遇した時点で駄目な「負けイベント」。

「おいおい嘘だろ。ドッスンで。おま、インフレし過ぎやろ」

運営なにやってんだよ。ドッスンは位置が固定されてるから動かんぞ。パワーバ  
ランス間違ってるんだろ。

というかなんで結構近くに現れるんだよ。いや、アイツがデカすぎるから数十  
メートル距離があっても近くに感じるだけか。いや何考えてるんだもちつけ俺。い  
や、落ち着け。

まあここは落ち着いて対処をだな…。

というか転移するだけですなはい。別に目で転移する場所探さなくても最初の方  
に登った(転移した)ビルの屋上とかに転移すれば…。

はあ、何焦ってたんだか。転移個性だぞ。俺。

ーそこまで考えた所で目に入る。あのクソでかい0p敵に潰されそうな少女が。

「…っかー！クソ！マジで運営無能かよ！ちよっとは考えろよ0p敵が受験生殺  
しちゃう可能性くらい！」

そう叫びながら転移する。頭の中ではしっかりと俺だけでも逃げる用意をしなが

ら。

ちようど加速が切れた時だったので少女の隣りに転移しても素早く動けない。

「持つぞ！」

「え!? あ、はい！」

よく見ると結構可愛いな！これ終わったら付き合ってくんないかな！

そんなことを考えながら少女を横に抱く。お姫様抱っこって奴だ。本当ならおんぶが良かったけど、おんぶしにくい位置に転移しちゃったんだから仕方ない。

女子の柔らかい肉体に少し感動を覚えながら立ち上がったその瞬間。

俺の頭の上でそれはそれはヤバイ音がした。

音を字で表すなら「バギバギバギ!!」とか「バコーーン!!」みたいな感じだ。何事かと上を見上げれば、緑髪を受験生が0p敵を殴り飛ばしていた。

「…嘘やろ……」

この時ほど正気を疑った時はない。いや、この後の人生でこの記録は簡単に更新されるが、当時の俺にとっちゃ大事件だった。

開いた口が塞がらないとは正にこういうことなのだろう。

もはや感動までした。世の中には尋常ではない奴がいるんだなあ。

「…って、アイツ平気か!?落ちて来るぞ!」

「っ!私をあの子に近づけてえ!」

え?何?君を彼に近づければ良いの?

俺は取り敢えず彼女の関西弁に従った。

あそこまで必死に言うんだから何とかする宛があるのだろうと。

で、結果は大丈夫だった。彼女のビンタによって彼はふわっと落ちる速度が無くなり、無事に五体満足で…って、ふぁ!?

全身バツキバキに折れてますやん!?

「おい!大丈夫か!?生きてんのか!?!」

怪我人を揺するのは良くないと思い、取り敢えず声だけをかけながら息があるか、心臓が動いているかを確認する。

…平気…なのか?

「せめて…1pだけでも…」

彼が呟く。

ええ…(困惑)。1pも取れなかったんか…。あれ？もしかしてこれ俺がp乱獲しちゃったのが悪い？

確かによく考えたら入試の間1回も止まらずp取り続けてたけど。

…と、そこで試験終了のお知らせ。

ここまですが俺の雄英高校入試、そして彼、緑谷出久と麗日お茶子との出会いであつた。

――

さて、皆。今から俺が超難問なクイズをする。

大丈夫。手軽にできるから。

さて問題だ。貴方が入った高校、入ろうとしている高校、入りたかった高校。

その高校の志望理由はな―んだ？

まあ答えなんざ人それぞれだが、大抵の人は面接で「進学率」とか「カリキュラムの充実」とか「設備の充実」とか応えたと思う。

そもでもって大抵の人はその理由とは違う理由で入学する。

大抵の人は自分の学力に合った、1番良い高校に行く。

で、俺も漏れなくその大抵の人に入るわけだ。

いけそうだからという理由で雄英高校入試を受け、強個性だから受かり、そのままなんとなく生きていく。

実に普通だ。

が、ここで思い出して欲しい。雄英高校がどんな高校なのか。

プルスウルトラが校訓で常に実力の120%を求めてくる。

入試のためだけに大量のロボットを使い捨てる。

あのクソでかい0p敵を入試に投入する高校だ。

普通？ほざけ。異常じゃボケ！

要するに、この学校は俺が普通であることを許すほど温くないってことだ。

だがしかし。俺は確固たる夢がある。

それは、フリーのサイドキックになって好きな時だけ働いてそれ以外は遊んで暮らすことだ。

そのために雄英高校に入っただけだ。

俺は決して雄英高校なんかに染まらない。

プルスウルトラなんてかったるいことするもんか。

プルスウルトラしなくても勝てるくらいじゃないと駄目だろ。

というか実力以上のことをし続けたら身体がもたねえよ。

へ？何？そこもプルスウルトラしろって？

そういうノリが嫌いなんだよなあ。

「俺は自己犠牲なんざあしねえよ！」

だからこそ決意を。

これは、全くヒーロー精神がない個性が強くて胆力があるだけの一般人が雄英高校という輝かしい学校に染まらぬように頑張る話である。

Q 「7日以上身に付けるって、ずっと同じ服で居続けるってこと？」

神出「違うそうじゃない。身に付けてた合計の日数が7日ってこと。

ついでに言っとくと身に付けるの定義は自分がその物体に触れているってことだから、合計時間で7日以上を越えて接触していれば生き物だろうと一緒に転移できるとなる」

## 逃げ足に自信あり

前話の個性の説明で、15日以上身に付けたものは一緒に転移できるっていうのを7日以上に直しました。

理由は特に無いです。

我が神出家は4人と1匹家族だ。

父、母、姉、俺、ペット。これが神出家の構成員。

そしてその構成員が、今全員集まっている。

いつも仕事で帰るのが遅い親父も少し早めに仕事を切り上げ帰って来ているし、大学から帰って来たらしいも部屋に籠ってゲームばかりしている姉貴も、本来ならご飯の支度で忙しい筈の母さんまで家事を中断して。

「ペット」も俺の胸ポケットにいる。

家族皆でリビングにある唯一のテーブルを囲っていた。

そこにあるのは緊張感と1つの茶封筒だ。

何故か俺より緊張している親父を横目に、封を切る。

…えっ？空？んん？

一瞬間が真っ白になったが、茶封筒を逆さにすると謎の物体が落ちてきた。

そういえば茶封筒を掴んだ時に変な感触がしたけど、これか。

『私が投影された!!』

あ、どうもっす。…って、はい？

その謎の物体は投影機だったらしく、オールマイトが合格を伝えてくれた。

というか焦らすような合格発表するなよ。一瞬で終わらせてくれよ。

…まあ流石に落ちた人にはそんなことはしないか。というかオールマイトが担当するかも怪しい。落ちたら最早投影機じゃなくて紙で伝えられるんじゃないか？

まあいいや。俺は今凄く気分が良い。

恐らく受験生が最も喜ぶものを貰えたんだから。

第一志望の高校からの合格届け。

そう。俺、神出鬼火都は雄英高校ヒーロー科1年に合格した。ついでに入試トッ

プで。

「…やたああああーっ!!」

「良かったねえ。本当に良かったねえ…」

「お前なら受かると信じてたぞ！」

「うわっW雄英のヒーロー科とかマジでエリートじゃんWしかもトップってWマジかW」

上から俺、母さん、親父、姉貴だ。

母さんは語彙力を失いながら涙し、親父はガハガハ笑い俺の背中を叩き、姉貴も語彙力を無くして喜んでくれてる。

いや、姉貴の語彙力はいつも通りか。

まあそれぞれ反応は違うが、俺の合格を喜んでくれた。

というか親父。あんた心配で昨日眠れなかったとか言ってる。手のひらくるってくるじゃねえか。

「信じてても心配なもんは心配なんだぞ」

…ま、そうか。

肩の荷が降りたというか、なんというか。

新しいパンツをはいたばかりの正月元旦の朝のようだ、というのは某漫画から借りた言葉になるが、まあそんなところだ。

なんかもう今なら空だって飛べちゃいそう。

いやまあ個性で飛べるけど。

もういつそ飛んじゃう？別に俺は飛んじゃっても良いのよ!?

「キビトW」

「なんだ姉貴？」

「正式に入学する前に犯罪犯すとどんなに優秀な生徒だろうが合格取り消しになるって知ってた？W」

「おうふ」

「ソースは私の友達。受かった喜びでハメ外して外で酒飲んでバレちゃって高校行けなくなっちゃったW」

「マジか」

「マジよW」

マジカー。止めとこう。うん。止めとこう。個性を外で使うのは軽いとはいえ犯罪だ。

流星に目立つ使い方は良くない。

危うく合格取り消しになるところだった。俺は馬鹿か。その点姉貴ってすげえよな。最後まで草たっぷりだもん。

っと。俺の胸ポケットから「ペット」が出て来る。

コイツの名前はアダンソン。アダンソン・神出だ。俺が名付けた。最高にセンスの良い名前だと思う。

「どうしたアダン。お前も俺の合格喜んでくれてるのか?」

アダンが頭を縦に振る。可愛い奴め。

「なんか最初はキモかったけど段々可愛く見えてきたわWやばいW洗脳されてるのかもW」

「やっとコイツの可愛さに気づいたか姉貴。ほら見る俺が正しかったろ?」

「いやW蜘蛛をペットにするとかどう考えても正気じゃないでしょWしかも10センチの蜘蛛とかWどう考えても異常個体W」

「そうだぞ。コイツは特別な蜘蛛なんだ。もうヴェルター○オリジナルあげちゃうレベル」

とうか蜘蛛は益虫なんだぞ。コイツ：アダンソンハエトリグモ、とうかハエトリグモは巣を作らない種類だからダニとかを取ってくれるだけの有能ペットなんだぞ。

あと可愛い。サイズもスマホくらいの手乗りサイズ。エサも人のご飯の残りで平気。

やはり有能だ。

…取り敢えず受かった。それだけで良い。今日は旅行に出かけよう。最近のマイブームのオーストラリアとかに行こう。

流石に遠すぎるからちょっと時間がかかるけど成長したからせいぜい5分くらいで転移できる。

個性訓練と称して色んな所に転移して遊び回った甲斐があった。

「姉貴も来る？」

「行くわーw」

因みに姉貴は小さい頃おんぶしたり筋トレで上に乗ってもらったりとか色々して  
る内にいつの間にか一瞬に転移できるようになっていた。

勿論アダンソンも。

さーて、遊ぶぞー!!

ーーー

さてさて。時間がググッと飛びまして入試式の日。

俺はついいつもの癖でどうせ転移できるからいいやと時間ギリギリまで家に  
いた。

で、転移を発動しようとした所で気がついた。

あ、制服とカバン持ってからまだ7日経ってねえ。転移したら服が脱げちゃうッ  
!

びっくりな事実。一応制服を事前に着ておいて既に何日か過ごしたけど、ま  
だ7日には達していない。

……。

時計は俺に残された時間はあと8分だと示している。

「ボク。」

考えろ考えろ考えろ。

私服登校?…これは最後の手段にしとこう。最悪登校中川に落ちてずぶ濡れになつて、一旦家に帰つて着替えたとかでいける。あ、でもカバン持つてけない。

プルスウルトラ?却下。無理だわボケ。

頼れる親父に電話?却下。あの人ピンチの時ほど役に立たな……それだ!!!

「もしもし親父!?今何処!!!?」

スマホを素早く起動させ親父に電話をかける。

「え?○○駅だけど?」

「今行く!!」

親父は「物飛ばし」という個性を持っていて生物以外のものを好きな場所に飛ばせる。

つまりは親父に制服とカバンを飛ばしてもらい俺は自分を飛ばす。

これでオールライト。

〇〇駅ならここから走って5分だ。駅近な我が家に感謝だぜ。

ーその後。

俺は無事に時間に間に合うことができた。

入学初日に校門の少し横にパンツと中シャツ姿で現れたのは恐らく俺が初めてだろう。急いで制服を着て走って教室に行けば間に合った。

…そういえばパンツ姿を誰かに見られた気がするけど、気のせいだな。

入学早々遅刻ギリギリ。クラスメイトもちょっとビックリしてた。

クラスで浮いたらどうしよう。

と、その時、俺の鼓膜を可愛らしい声が揺らした。

「あ!! 転移の人!!!」

?…!!あの助けようとした少女じゃないか!

そうだよそうだよ!このためにフラグを立てたんだよ!

いやあーこれはクラスで浮くどころか入学早々リア充か!?

「おはよう。俺は神出鬼火都っていうんだ。気軽にキビトって呼んでくれ。よろし

くな」

よしイケメン挨拶。昨日寝ないで(5分くらい)考えた完璧な自己紹介。サラッと名前呼びを強要する当たりがポイントだ。

「よろしく！私は…」

だがしかし。少女がそこまで言ったところで俺達の青春(笑)は止められてしま  
う。

イモムシのような寝袋から不健康そうなおじさんが1匹出てきやがった。

なんだ？不審者か？おおん？やんのか？俺の青春を邪魔する奴は容赦なく殴  
るぞ？

…え？担任？…おいおい雄英、マジかよ。

は？グラウンドに出ろ!?頭沸いてんじゃ…あ、はい、別に睨んでなんかいませ  
ん。だからこっちをチラッと見ないで下さい。その無駄に眼力のある目でこっちを  
見ないで下さい。

親と子供、資本家と労働者。この世には覆し難い力の差があるのだ。

だから支配階級である先生からの命令は、被支配層である生徒の俺はを従わせる



で、爆豪はそれはそれはやっべえ記録を出したとさ。

コイツ、内部情報を知ってやがる!?

それも入試順位から各生徒の個性まで。これは危険だ。今のうちに消しておくか…。

あ、やめて。冗談だから。というかなんで心の声読んだかのようにこっち見るのさ。

そういう個性？だとしたら俺とっくに除籍確定されてそう。

ここは1ついい所見せないと。

150メートル走1

「先生、本当に何をしてても良いんですね？」

具体的に何をするかを言わないで再度確認をとる。

「ああそうだ早くしろ」

言ったなあ？

それはつまり、服を脱いでも良いってことですよねッ!!

俺氏、50メートル走タイム0.02秒。

人間の反応速度の限界はおよそ0.2秒と言われている。

しかし、俺はその限界を超えることに成功した。

簡単に言えば、スタート合図が来るのをだいたいこれくらいかな〜?と考えて予測で個性を発動した。

たとえ精神的にフライングだろうと実際に動き出した時間がフライングしてなければセーフなのだ。

1回目はそんなことはしなかったが、2回目にはもう1回目で記録が出ていたためさらなる向上を目指してこれを行った。

狡いように思えるが、よく考えてみて欲しい。

もし戦闘で敵と対峙した時、こんな状況が有り得るのか。

スタート合図が送られてからじゃないと動いてはいけない?

そんなことはない筈だ。もし人質がいても俺の個性でいきなり現れて敵を蹴り飛ばせば問題ない。

「何故服を脱いだ？」

「7日以上身に付けていないものは一緒に転移できない個性なんですよ」

「：はあ」

俺は水色と黒の縞パンを晒す代わりに除籍回避を行うことに成功した。

：まだまだ新体力テストは終わらないが。

この調子で全部乗り切れるかな。

俺は制服を着ながら考えた。

┆握力┆

いくら強個性とはいえ出来ないこともある。

右手と左手の平均が42。

これが記録だ。仕方ない。

┆幅跳び┆

まあそうだよ。空中で転移しまくって遊んでたらこう判断されましたとき。

∞ !!

ー反復横跳びー

これも俺の個性が強個性と言われる理由の1つだが、この個性、クールダウンを必要としない。まあ要するにやろうと思えば1秒間に何百回も発動できる。∴  
流石に距離が空くと無理だけど。

とまあそんなわけで。残像による分身が3つできました。

測定不能により∞ !!

こちら辺でみんな俺のパンツ姿に慣れちゃったね！

ーボール投げー

…これは俺の中で重要なものだ。

握力とかとは違つて「やろうと思えば記録を伸ばせる」種目だ。

「…おらっ!!」

俺は気合いを入れてボールを真上に投げた。

そして空中のボールの横に転移。ボールを掴んで上に投げる。

これをしばらく繰り返し、息が苦しいほど酸素が薄いところになったら止め、足から落ちる。

大丈夫。スカイダイビングなら個性の暴走で何回も経験済みだ。

落ちる。オチル。おちる。

そして地面ギリギリで身体の向きを変える。上手く手でボールを掴んだまま、45度傾ける感じ。

そして、投げる。だいたい標高5000メートルくらいから落ちた。その力を、ボールに乗っける。

右手を大きく振りかぶり脚を引く。

最後に指で押し出して終わりだ。

で、そのままだと白線からはみ出てしまうので転移。向きを鉛直上向きに転移。減速し止まったところで地面に転移。

で、転移。ボールの横に現れ、掴み、投げる。

おお。結構飛んだな。

結果、512メートル。まあ、そんなもんか？

「緑谷くんはこのままでと不味いぞ」

眼鏡の奴が言う。俺か？俺に話しかけたのか!?

「つたりめえだ！無個性の雑魚だぞ!!」

うおっ！なんだよお前！何？爆豪？あ、そう。

アイツ、入試で0p敵ぶっ壊した奴だよなあ。

で、その後全身大怪我した奴。

怪我を代償に力を得るとか、そんなところだろう。

というかアイツ受かったんか。

敵Pが1ポイントも貰えなかったとか言ってたから、救助Pで受かったのか？

…ガチのやべえ奴じゃねえか。

自己犠牲大好きマン。Mなのか？Mなんだな？なんだただのMか。って、ええー。すげー飛んでる。

なるほど、指だけに個性を使ったのか。

…って、おい！ダウト!! おかしいぞそれ！

指だけでそれはおかしい！

オールマイト並だよそれ！

…いや、あのOp敵ぶっ飛ばすくらいだしそれくらいできるのか？よく考えれば踏ん張りが効かない空中で殴ってあれだしな。

なんだよそのジャンプ漫画主人公みたいなの。

…まあ、羨ましくはないな。寧ろ絶対なりたくない。

↑上体起こし↑

俺の個性は体勢を変えながらの転移はできない。

自分の身体の1部分だけの転移はできる。実際に爪の白い部分だけとか、髭だけとかを転移する実験に成功した。

が、自分の上半身だけを転移するのは無理だ。いや、できるが、絶対したくない。理由は簡単。胴がちぎれるからだ。どんなに上手くやっても数ミリ「ズレる」だけでアウトだ。

よって結果は普通。30だった。

―持久走―

これは本当にガバガバな競技だった。

一直線だったら転移で一瞬なのだが、輪状のコースだったからそうは行かず。

結局コースに沿って転移を連発した。

で、記録は0・2秒。まあ、転移個性だもんね。仕方ないね。

―長座体前屈―

こう、ググッと。

地味にそこそこのいい記録。42。

――

除籍はウソだよーん。

…。

随分演技力が高いんですね。というか変人だから何してもおかしくないと  
思っ  
ちゃいましたよ。

あっははは。

はあ…。

あ、因みに順位は1位だった。

どういう判断基準なんだろうかこの順位。

まあいいや。

今は下校中だ。一人で。

やっぱり友達出来なかった。いや、スタートダッシュ遅れただけだから!! まだ巻き返せるからッ!!!

と、俺が脳内で言い訳大会を開きつつ明日は早めに登校しようと決意している  
と、後ろから声をかけられた。

「おいそこのクソ白髪！」

失礼なッ！そういう髪の色ってだけで白髪ではない！断じて違う！

「なんだ4位か」

おっ。イラついてるイラついてる。ああいう性格の奴は順位を気にするのだ。俺  
が1位、おっぴいが2位、紅白が3位。

アイツは4位だ。

もう一度言おう。俺が1位。アイツは4位だ。

「誰が4位だってこらてめえ!!」

「お前のことだよ4位」

「がー！！！！」

なにこれ面白い。4位。ほら4位。4位4位4位。

顔真っ赤じゃん。

「次はぜってえ負けねえぞクソが!!」

それが言いたかったのか。

いやまあ今回のテストは俺の個性の相性が良かったただけだしな。

「:わかった。楽しみにしとくわ。4位」

「4位って言うな!」

その後彼は「ケッ」と吐き捨てて去って行った。

やっぱり面白い。今度からアイツと話す時は語尾を4位にしよう。

小さくなっていく彼の背中を見ながら俺はそう考えるのだった。

その時、聞き覚えのある声が後ろから聞こえた。

「あっ! キビト君!」

あの名前を聞きそびれた女子だ。なんて言うんだろ。あ、そういえば緑谷が麗

日って言ってたな。

「麗日さん?」

「そうだよ！なんでわかったの？」

そうだよと聞くと淫夢に繋がる。あ、いやそうじゃない。

「そっちの緑谷くん？が言ってたから」

緑谷がビクっとする。おう。典型的なコミュ障か。

「あ、名前合ってる？飯田君が言ってたんだけど」

取り敢えず中身のない薄っぺらい会話を繋ぐ。

その後飯田も含め4人でだべりながら帰った。

道中の会話で緑谷の俺の個性への食いつきが凄かった。

応用性がどうのとか色々言ってた。

もう典型的なオタクだった。

これには麗日さんもニッコリだ。引かれたな。

強く生きて緑谷！少なくともスカしたイケメンとかよりは好感持てるよ！

## 主人公の容姿

透明感のある白い髪は短髪で、乾燥気味な白い肌を持つ。目の色はグレー。でも私服はカラフル。

身長は175で平均的。声は切島くらいの低さ。

まとめそんなに特徴的ではないよ！

## 転移を使ったヒットアンドアウェイ(笑)

力があるのに使わないのは罪である。

どこかの本で読んだ言葉だ。なんとなく今も覚えてる。

共産主義はこの考え方なのだろう。俺が嫌いな考え方だ。

例えば荷物を運ぶ時。10 kgの荷物まで持てるA君と5 kgまでしか持てないB君がいたとする。

その時、B君もA君も同じ5 kgの荷物を運んだ。

で、A君は怒られたがB君は怒られなかった。

仕方なくA君は10 kgの荷物を運んだ。

しかし報酬はB君と変わらなかった。

ふざけてるよね。これ。

もっと言うなら、「運動できるんだからもっと頑張りなさい」とか「頭が良いんだから努力を続けなさい」とか。そういうのだ。

素質があるということが努力する理由になるのだ。

俺はこの考え方が嫌いだ。なぜなら俺は大抵の場合「A君」だからだ。

で、長々と話したが、どんな考え方にも例外はある。俺はこの例外があることを知らなかったが、高校に入ってから知った。

なんでもその例外は「プルスウルトラ」とか言うらしい。

要するに。5 kgの荷物までしか持てない人が10 kgの荷物を持つこともあるらしい。びっくりだね。まあがんばれよB君。

え？何？俺もやるの？いや俺は10 kg持てるんだからいいじゃん。

何？次は15 kg？ふざけてんの？

だから嫌いなんだよこの考え方。

—————

さて。今日は昨日の遅刻ギリギリだったのを反省して早めに学校に来ている。これもあと2日程度の辛抱だ。そうすれば転移できるようになる。

で、早めに来たおかげで俺は友達作りに勤しむことができている。

「おはよう。昨日は自己紹介できなかったけど、神出鬼火都だ。神出鬼没、神出鬼火都しんしゅつぎぼつとでも覚えてくれ。よろしく」

俺は後ろの席の金髪の典型的チャラ男に話しかけた。

「というか昨日はほぼ席に座ってなかったからスルーしてたけど、俺の席教室で1番前なんだよな。」

ハズレな席ランキング1位の教卓の前の席だ。

「おお！パンツマンか！俺、上鳴電気な」

やめろお！除籍とパンツを天秤にかけてたら誰だってパンツを取るだろ！！

「やめてッ！その呼び方は定着しちやいそうだからッ！キビトって呼んでッ！」

「わかったわかった。よろしくなパンツマン」

「何を理解したんだよ！」

昨日の爆豪の気持ちが変わった気がした。すまん4位。

「というかお前どういう個性なんだ？昨日何やってるか良くわかんなかったぞ？」

「あー、ワープって個性だけど、速度を保ったまま転移できるって感じかな」

「へー。俺の個性は…」

これなら普通に友達出来そうだな。流石英雄ヒーロー科といったところか。皆性格が良い奴らばかりだ。

――

さて、ここで唐突な過去編に入ろうと思う。あれは俺が小学三年生の時だった…。

「とーさん。俺ヒーローになるわ」

突然少年はそう宣言した。

「これはまた、どうしてだい？」

少年は皆がヒーローに憧れを持つ中、あまりヒーローを特別視することなく、ヒーローに興味を持たない珍しい子どもだった。だから、彼の父は当然驚いた。

「俺って個性強いじゃん？ だったら向いてるのはヒーローかなーって」

父は思っていたことと真逆の言葉が返って来たので、一瞬固まった。

「…ヒーローはあまり軽い気持ちでなれるものじゃないぞ。

そんな気持ちでいると…こうなっちゃおうぞ？

どうしてもなりたいのか？」

彼は自分の頭を指で指した。そこには包帯が巻かれている。

そう。少年の父はヒーローだった。しかし怪我を負ってしまい、引退した方がいい状況だった。

そんな状況で息子がヒーローになると言ったのだから、とーさんの仇を打つためにヒーローになる、とか、とーさんの跡を継ぐ、とか言うのかと思ったところにさっきの言葉だ。

少年がなぜヒーローになりたいと言うのかますますわからなくなったのだ。

「俺の個性ならけがをする前に逃げられるし、けがをしちゃっても逃げられるよ」  
…何を言うかと思えば。

「はあ…。そんな簡単じゃないぞ？例えば後ろから刺されたらどうする？」

「そんなのプロだって対処できないんじゃないの？」

「プロはそんなことは事前に防げるんだぞ」

そう言われると、今度は少年が呆れた顔をする。

「じゃあとーさんはなんでそんなになつたのさ？」

：思わず父は言葉につまり、しかし堂々と言った。

「俺は市民を庇つたんだ。名誉の傷さ」

「とーさんなら個性で盾とかをてんいすれば防げるんじゃないの？」

「それができない状況だったんだ。相手は高火力の炎系の個性だった。俺の身体も盾にしないと守れなかつたんだ」

父はどこか誇らしげに言ったが、少年は何か変な物でも見たかのような顔をした。

「とーさん、言いわけ？」

言い訳。少年の母が少年を叱る時によく使う言葉だった。だから、自然と言葉が口から出たのだろう。

「違うぞ？あの状況ではこうするのが最善だったってだけさ」

「とーさん。とーさんがその人をかばって引退したら、救えるはずだった人も救えなくなっちゃうんじゃないの？」

父は片眉を上げる。

「それでも、目の前の人を見捨てるのはヒーローじゃない」

「…ヒーローって、人をかばってって死にかけるぎむがあるの?」

父は何故か一瞬怯んだ。小さい少年が難しい言葉で重要なことを言ったからかもしれない。少年が本気でそう聞いたからかもしれない。どちらにせよ少年は不思議な圧力を持っていた。

「…俺は、あると、思う」

ゆっくりだが、本気で、迷いなくそう応えた。

「俺は、ヒーローになってもそんなことをしないよ」

「…」

「自分の命を大切にする」

…それは、ヒーローではないな。

「じゃあ、ヒーローじゃなくていい。ヒーローっていう職業につきたいだけ」

なるほどね。称号じゃなくて、職業。

でも、そんなことしたら嫌われ者のヒーローになる。

「俺、嫌われ者でもいいよ。嫌われるかくごがないような奴は、ヒーローなんてで

きないよ」

ツ!! 一瞬少年からプロヒーロー特有の「覚悟」が発せられた気がした。

「それに…。俺、自分の命をかけないと人を救えないような弱いヒーローにはならないよ」

どんなに強いヒーローだって追い詰められる時があるし、絶対なんて保証は何処にもない。が、そんなことを言わせない何かが、少年にはあった。

これは…。コイツなら本気にヒーローになれるかもしれない。

「…わかった。お前にコレをやろう。俺がヒーローになるために使った道具だ」

少年の覚悟に感動したわけでもないし、少年の個性が強いから未来を託すというわけでもない。

ただ、少年、神出鬼火都という男に負けたのだ。なぜ負けたのか、どこが負けたのか、どう負けたのかはわからないが、ただただ負けたと思わされたのだ。

父はどうして俺の息子があんなに立派に育ったのか考え、呟いた。

「…母さんに似たんだろうなあ…」

で、今俺が手に持っているのがその時親父から貰った道具。鉄球だ。

親父が個性を鍛える時、訓練に使ったのがこの鉄球。重ければ重いほど個性を鍛えられるのでとても効率が良かったらしい。

俺も鉄球で鍛えた。鉄球を何とか持ち上げて、一緒に転移する。これの繰り返しをした。

俺の個性も親父と同じく一緒に転移する物の質量が大きいくらいほど体力を消耗する。だから鉄球と一緒に転移するのは大分いいトレーニングになった。

10 kgのができるようになったら15 kgと、段々質量を増やしていった。

で、今は50 kgまでいける。というか、鉄球の重さの限界が50 kgまでしかなかった。

別に親父のお古じゃなくて新しく買えばもっと重いのもあるけど、別にそこまで鉄球にこだわるつもりは無い。

で、なんでその思い出の鉄球を今手にしているかというのと、ヒーローコスチュー

ムに含まれるからだ。

今あの鉄球には鎖が付いていて、針の無いモーニングスターのようになってい  
る。要するに俺の武器がコイツになるってわけだ。

なんでわざわざこの鉄球を武器にしたかというのと、俺の個性の性質の問題だ。

俺の個性、自分に馴染みのあるものであるほど一緒に転移する際の代償が少なく  
てすむのだ。

だから自分の身体が1番燃費が良く、その次に姉貴とかかな？まあいいや。そ  
れでこの鉄球は都合が良かったってわけだ。

コスチュームに着替え途中、緑谷が話しかけて来たので鉄球についての説明をし  
たわけだ。あ、過去回想云々は話してないよ？

「へー！具体的にはどうやって使うの？」

「うーん、緑谷と敵対する訓練かもしれないし話したくないかな」

「！そうだよね！そうだよちよつと考えればわかるじゃないか。雄英高校だ。  
こんなに色んな設備が整っているんだからそれを生かすような実技をするだろうこ  
とぐらい……」

ブツブツブツブツブツブツブツ。

おお。凄いな。オタクオタク言ってたけど、ここまでとは。

「…なんとという緑谷って、敵の分析とか得意そうだな」

「えっ？あ、そうかな？」

え、とかあ、とかをつける喋り方は凄い親しみが湧く。いや、俺はあんまり使わないけど。

少なくとも陽か陰かで別けるとしたら俺は恐らく陰の方に分類される人種だからな。

と、言ってる内に着替え終わり移動し始める。

さあて、何をやるんだろうな。簡単なのがいいな。

――

敵が核兵器持っていることを想定した屋内訓練をするよ！

敵チームとヒーローチームに別れて戦うよ！

ヒーローチームは核兵器に触れれば勝ち！敵チームはヒーローチームを捕獲するか核兵器を守りきれば勝ち！

ヒーローチームを捕獲する時、確保テープを使うよ！

こんなルールの訓練だった。なんかゲームみたいだな。

あ、そういうばあの後峰田という奴が麗日さんのパツパツスーツをみて

「ヒーロー科最高」

とサムズアップしてたので俺もサムズアップ仕返し、

「これはサムがアップしちゃいそうだな同士よ」

と返しておいた。あの反応から見るに恐らく俺の言葉の意味を瞬時に理解した筈だ。

こういう時の男の友情は強い。エロは世界を救うのだ。どうやら峰田とは仲良くなれそうだ。

さて、そんなどうでもいいことはさておき。

第1試合は爆豪と飯田の敵チームVS緑谷と麗日のヒーローチームだった。

結果は爆豪チームの負けだった。これをネタに煽ろうかと考えたが、結構ガチで

落ち込んでたからやめといた。

それでもって次が、尾白と神出の敵チーム VS 轟と障子のヒーローチームだ。

要するに俺の出番だ。轟っていったら推薦合格でなんか強い人ってイメージしかないが、どうなんだろうか。

取り敢えず尾白と作戦を練る。

「実は俺のヒーローコスチューム、特にこれといった細工は無いんだよね。今更機能付けても一緒に転移できないし」

「それに関しては俺もだな。体術が得意だから動きやすくて俺らしいコスチュームっていうことでこうなった」

尾白のコスチュームは空手選手って感じだ。

空手か。俺やったことないからよくわかんねえや。

「ヒーローチームだったら適当に窓突き破って侵入して核を見つけたら転移で即終了だったんだけどなあ」

「…なかなか神出君強いよね」

そう言って貰えると嬉しい。

「取り敢えず俺が轟をなんとかするから障子を頼むわ」

「わかった」

障子っていったら握力がヤバい異形個性としか覚えてない。手がいっぱいあるやつ。

恐らく接近戦しかできないだろうから、尾白に頼んだ。

轟は氷で寄せ付けないような戦闘をしそうだし、俺が転移で殴った方が良いかなと。

さて、そろそろ始まりそうだな。

3、2、1、0…!?

「は!?!何これ!?!」

スタートと同時に床が、いや、壁も天井も全部凍った。

そんなのありかよ…。そう思いつつ転移で抜け出す。

尾白は…

「抜け出せそうか?」

「…ちよっとキツそう」

…これは、戦力が1人減ったと考えるべきか。  
まずいな。どうしよう。

俺達は今核がある1番上の部屋にいる。ここは俺が転移で轟と障子を探して足止めするしかないな。

轟の注意を引けば尾白への氷に集中できなくなって溶けだすかもしれないし。

「氷が溶けたり、壊せそうだったら抜け出して障子を倒してくれ。俺は轟を倒す」  
取り敢えず2階に転移。轟は…いた。1階にいる。障子も隣にいる…って、こっち見たな。探索にも生かせる個性なのか？

試しに転移して別の場所から見てみるが、これもバレた。

…不意打ちはできそうにないな。

「よう紅白マンとタコマン。元気してたか？」

敵らしく適当な挑発をしながら挨拶をする。

「…障子、下がってろ」

「…わかった」

なんだコイツら。せめて応えてくれよ。…と、それは置いといて。障子を下から

せるってことは氷に巻き込ませないためってのと、安全な場所から敵の動きを把握し、轟に伝えるためだろう。

だけど：

「障子が指示出してからじゃ、遅いんじゃないのッ！」

転移で轟に蹴りを入れる。いや、正確には転移する前に蹴りを放ち、威力が最大に達したところで転移を発動した。

要はいきなり背後に現れて蹴りだけ入れたってわけだ。

蹴りはしっかり頭に入り、轟が吹っ飛ぶ。

追撃を入れようとするも、轟が氷で反撃をして来た。

まあ、意味無いんだけどね。

おれが用意した追撃は、思いつきり足を上から下のに振り落とす、要はかかと落としだ。もちろんそんなのは距離が開けられたから当たるわけがないが、俺の個性なら問題はない。

しっかりと轟の頭上に現れて頭に重いのを叩き込む。

…って、ええ…。あんだけやってまだ倒れないんかよ。しぶといな。…でも、ア

イツの攻撃あたりそうにないし、案外余裕があるな。これは、隙をみて障子も倒せそうだ。

っと、轟が攻めて来た。氷のブツパだ。もちろんこれも転移で避ける。そして轟の背後に現れて拳を放とうとするも、この動きは読まれて、これまた氷のブツパにより防がれてしまう。

もちろんこの攻撃も転移で避けた。

いったん外に転移だ。で、空中に転移して加速しながら落ちて、その勢いを保って転移し、障子を蹴り飛ばす。

転移しながらチラチラ見てたけど、隙をみて上へ上がろうとしてたからな。

そして今度は、また空中に転移し、「ある物」を回収する。

そのある物は、俺が空中に転移する時に一緒に転移して、その後転移する時に意図的に置き去りにしたためずっと落下を続けていた。

そう、鉄球である。ちなみに20kg。

俺の体で耐えられない加速や衝撃にも、鉄球なら耐えられる。

そしてその鉄球にタッチした俺は轟に挨拶に行く。どうやら轟は氷を溶かして上

の階に移動しようとしていたようだ。

さて。ここでヒーローなら技名とかをとかを叫ぶんだろが、俺はしない。

というか叫んでも転移の前後で途切れるからどうせ伝わらないし、叫んだら奇襲にならないし。

なので心の中で叫ぶ。

行け！鉄球アタック!!

うん。我ながらシンプルでカッコイイ名前だな。

鉄球アタックは轟の腹を横から殴り、壁に叩きつけた、と思う。

どうしてそんな不確定な表し方かというところ、あのままだと俺も壁にぶつかるので空中に転移して逃げたからだ。

運動の向きを鉛直上向きに転移することで勢いを消し、轟の様子を見に行く。

流石に轟も鉄球アタックには耐えられないらしく、よろよろと倒れ込んでいた。

障子も気絶していたし、これは俺の勝ちだな。

確保テープで2人を捕らえる。

…よく考えたら障子は最初から確保テープで良かったな。

まあそんなこんなで俺の訓練は案外あっさりと終わった。

――

「こ、今戦のベストは神出君だね！」

「というか神出エグすぎだろ。いきなり現れたと思ったら蹴りだけ残してまた消えるんだぜ」

「防ぎようがないわね」

「これ程奇襲向きの個性はないな！」

「俺、全然活躍できなかったな……」

上からオールマイト、切島、梅雨ちゃん、砂藤、尾白だ。

尾白にはなんか申し訳ないが、我ながら完璧な戦闘だったと思う。

「ただまあなんとというか、パフォーマンスはちょっと足りないね!! ヒーローたるもの派手やかさも必要だから、何が何だか分からない内に戦闘が終わったりするのは頂けないね！」

うっ。そこを突かれると痛い。でも個性上仕方なくね？

あれか？隕石とか落とせばいいのか？…頑張ればワンチャンいけるか？

「なんか凄い危険な思考をしてないか神出少年!? 取り敢えず、どこから蹴りや鉄球が飛んでくるか分からない恐怖は敵に圧力を与えられるし、戦闘という面ではパーフェクトだったさ！」

よっしゃ。…もういっそ、世間の目を気にしなくていいように相澤先生みたいにメディアへの露出お断りなヒーローになろうかな？

その後も轟、障子、尾白が評価され、俺達の組の評価は終わった。

あ、爆豪がこっち見てたからドヤ顔したら、すっげえ青筋浮かべてた。元気が出たようで良かったね。

って、あれ？なんか今度は真剣な顔して俯きでした？

…どうしたんだ爆豪。なんかこう、お前はもっとな爆発的にDQNな奴じゃなかったのか？

そしてその後も順調に戦闘訓練は進み、無事に全部の戦闘訓練が終わった。

…このクラスの中だと、切島とかが俺の天敵かな？俺式ライダーキックとかを

食らわした時に硬化されたらこっちが大怪我をしてしまう。

まあそういうのを防ぐ為にも鉄球アタックがあるし、実際に戦ってみないと結果はわからないけど。

あの後反省会を開いた。で、爆豪が先に帰って緑谷が入れ違いでやって来て、爆豪を探しに去っていった。

因縁の仲なんだろうな。知らんけど。

この反省会の時、俺は峰田にある提案をした。

簡単に言えば、仲良くなろうぜって感じの提案だ。

もし俺が峰田と一緒に転移することができるようになれば、いきなり現れてもぎもぎをくっつけて消えるという超害悪戦法ができる。だから峰田と仲良くなっておこうといった感じだ。

それに、性格的にも気が合いそうだしな。

そんな訳で俺の峰田肩車生活が始まった。

峰田「なあ神出。女子のスカートの中に転移を…」

神出「…峰田。俺の親父はな、俺と違って物を転移させる個性なんだ」

峰田「お、おう？」

神出「それも、視界に入っている物を右手に転移させるっていう個性だ」

峰田「…！まさか…」

神出「そう、そのまさかだ。親父は女子を見ただけで丸裸にできる個性なんだ」

峰田「!?」

神出「しかも元ヒーローだから個性の使用許可は降りるから、女性敵が現れたら  
問答無用で服を剥ぐことができる」

峰田「なん…だと…!?」

※そんなことはしません

ついでに、神出(父)のキャラ紹介

神出早手(かみではやて)。個性物飛ばし。

昔は転送ヒーロー「キャリーマン」だった。

彼の個性は、左手で触ったことのある所、右手で持っているものを飛ばす能力と、視界に入っている生物以外のものを右手に転移させる能力がある。

この個性で敵が武装している場合は即座に武器を取り上げることができ、更に敵を左手で触れば敵に右手で持っているものを飛ばせるので、手錠をかけることも可能という地味に強いヒーローだった。

ちなみに神出(息子)の荷物を雄英高校に転送した時は、神出(息子)が「左手で触ったことのある所」判定だったので、そこに向かって荷物を転送した。



彼のコンビニ感覚は信用できない。

短いです。すみません。

さて。今日は日本の山の中にある秘境と呼ばれている温泉に来ている。

モチのロンで混浴だ。

：見渡す限り猿すらいないが。まあ、朝っぱらからこんな山奥の風呂に来る人なんていないか。

でもあれだ。家の風呂より確実に気持ち良いし、自然に囲まれた風呂ってのも良い。

目的は朝風呂だ。登校前に一風呂浴びてから行こうと思ったただけだ。やはり転移個性は最強だな。

ちなみに自分の体だけを転移させることで服を脱ぐ手間を省くことができる。皆も是非試してみてくれ。

さて、そろそろ風呂出るか。自分の体に着いている水分を置き去りにして転移をする。

こうすることで体を拭く手間が省ける。皆も試しにやってみると良い。

「うわ！Wいきなり現れてないでよWというかなんで全裸？W」

あ、すまん姉貴。温泉行ってきた。

「やっぱ便利ねその個性Wというか今度は私も連れてってWあ、そうだW朝ごはん出来てるから食べるとしてW」

あざす。流石姉貴。

…やっぱ人の作ったメシはうめえ…。

「その前に服を着ろW」

忘れてた。

————

さて、そろそろできるかな？

何かかというと、制服とカバンを持った状態での転移だ。

7日間身につけないと転移できるようにならないが、俺の個性も成長しているだろうし6日くらいでできるようになっていてもおかしくない。

入学する前に事前に何日か身に付けておいたから、いけるんじゃないか？

で、結果は成功だ。転移実験は自分の部屋の中でやった。

いきなり学校に転移して失敗したらまずいからね。

さて、今日から転移登校始めますか。なに、楽をしてるんじゃないかって、個性訓練さ。

「おはよう」

「うわわ！！？」

俺が自分の席に転移すると、たまたま通りかかったボブヘアの子とぶつかった。クールな見た目の癖に可愛い悲鳴だった。可愛い。

これはもうラブコメ展開が来ちゃうんじゃないか？

胸の大きさもしっかりと俺の好みだし。これはもう俺の青春が来ちゃうじゃ（ry  
「ビックリした！いきなり現れないですよ」

これは…。ツンデレか。流石雄英高校。レベルが高え。

「悪い悪い」

くうっ！頑張ってもこれくらいしか返す言葉がない！どうにかキザでカッコイイ返しはないのか！語尾にセニョリータ付けるだけでカッコ良くなれるって噂を試す時が来たのか!?

「おお。ビックリした。あーそうそう耳郎、この前お前が言ってた個性の使い方がな…」

「ああね。でもそれって…」

へ？俺スルーして2人で会話？しかもお前呼び？ボブ子ちゃんの顔もなんか嬉しそう。

てか、ボブ子ちゃんチャラ男に話しかける為に俺の席通ったのかよ！運命の出会いでもなんでもねえじゃん！思いつきり脈ナシじゃねえか！

はあ。中学校の頃からろくな恋愛してねえ。

一応強個性持ちで運動勉強そこそこできる優良物件なんだけどな。多分顔も悪くはない…と、思う。

やっぱあれかな。登下校を転移で済ませたりしてたから、道端でばったり美少女とエンカウントする確率が0だったのがいけないのかな。

…にしても、そうか。中学校の頃は転移登校は当たり前だったから忘れてたけど、そりゃあいきなり現れたら驚くか。

中学ではもはや名物と化していたなあ。俺がどこに現れるかで賭けが行われてたりしたなあ。

そういえば、俺と長谷川が手を組んで、長谷川が大穴の「ロッカーの中」に大量に賭けて、俺がロッカーに現れる代わりに半分金を貰う取引とかやったな。

良い小遣い稼ぎになった。賭けのシステムは参加料50円で、賭けた場所に1番近い奴が総取り、同じ場所に複数人賭けていて正解したら山分けだ。いやー、ぼろ勝ちですわあ。

その日も何となく授業を受けてやってきた昼休み。

何故か雄英ガード？ウォール？だっけ？が突破されたらしい。なんか、敵が攻め込んで来た？

皆逃げ惑ってるから全然状況が分からない。

まあ、あれだよな。困った時に俺がやることなんて。1つしかない。もう選択肢がそれしかない。

転移。雄英高校の校門に。

そして、そこにはボロボロに崩れ去った雄英高校の防御装置があった。

…やっべえ!! え!? 誰がやったの? これができる個性?

人には使えるんだろうか。流石に物だけか?

というか、人に使ったら…やばいですね。

にしても、肝心の敵が見つからない。もう侵略してるとしても流石に消えるのが早すぎる。

…としかして、匣か?

だとしても、たかが一生徒に何ができる。

うーん、無理だ。こういうのは頭が良い人にやって貰わないと。転移連発してりゃ取り敢えず勝てるんじゃないかね? といかう脳筋思考をしているような奴の出る幕

じゃない。

…戻るか。転移。食堂へ。

俺が戻ったら、何故か皆落ち着いてた。ええ…。

いや、何事もなくて何よりだけど。

「あ！良かった！神出君どこ行ってたの!？」

俺に緑谷が話しかける。校門に転移して様子を見てきたと伝える。門の壊れ具合は…まあどっちにしろ下校の時に見るだろうしいいか。

結局その日も何事もなく終わった。

で、だ。そろそろ俺の真のヒーローコスチュームが解放される。

真のヒーローコスチュームとは何なのかという点、まあそのまんまなんだけど、本来のコスチュームだ。

この前戦闘訓練をした時は私服をチョロっと改造した程度だったけど、こっちは違う。

もう、バリバリでガッチガちなやつだ。

ここで1つ質問をしよう。人を素手で殴るのと、ナイフで切るの、どっちが強いでしょうか？

正解はナイフだ。当たり前だよなあ？

俺のコスチュームはそういった当たり前に強い機能が盛りだくさんだ。だけど、訓練の時はまだ「馴染んで」おらず一緒に転移できなかったため、仕方なく家から持って来たジャージセットで戦ったってわけだ。

で、そろそろその本来のヒーローコスチュームも「馴染む」頃合いだ。

ふふふ。次の戦闘訓練の時は覚悟しとけよ。

我ながら結構エグいぞ。

よし。じゃあコスチュームの自慢大会でも開くかな。

まず、手は当たり前だが指ぬきグローブだ。これは流石に外せない。男のロマンだからな。

このグローブは鉄の板が入っているし、繊維自体も丈夫なのでパンチの威力向上及び手の保護になる。

次に腰についてる黒いホルスター。ここにはナイフが入ってる。

普通ならナイフは人の命を奪いかねない危険な道具だが、俺の個性なら的を外すことはない。「既に攻撃が当たってる状態」で現れるからな。

必ず敵の腱を切ることができる。狙い目はアキレス腱だな。

このナイフはマジで重要だ。俺の個性は重力加速がないとあまり威力が出ないため、連撃が弱くなってしまう。

本来なら転移で敵を翻弄できるはずなのに、威力が足りないせいできないのは惜しい。

そこでナイフだ。これはマジで強い。

そして足先、つまりは靴だが、靴は黄色のブーツになっている。

デザイン性も抜群だ。

そして機能だが、ブーツの先にトゲトゲがある。

このトゲトゲは鉄製で、刺さる。致命傷を与えることのない程度のリーチだが、

蓄積ダメージを与えるのに最適な長さだ。

単純に威力を上げるために刃物をくつつける。まあ当たり前な考えだが、だからこそ強いんじゃないか？

後はまあ、胴体には無難に防弾チョッキを仕込んだTシャツだ。耐火性がある丈夫な繊維とか言ってた。

緑と赤の横縞模様だ。凄いカッコイイデザインだと思う。

ズボンは丈夫さよりも動き安さをとった緩めのジャージだ。

だが、もちろんこっちもできるだけ丈夫に作ってある。

まあそもそも俺の戦闘スタイルは敵の攻撃は転移で避けるスタイルだからあまり防御に振る必要はないけど。

そもそも相手が力が強い敵だったらこんなものは焼石に水程度だ。

あ、色は青色で膝だけ黒く塗ってある。本当にセンスが光るいいデザインだな。

後、頭には何も付けない。付けると視界が悪くなり、そうすれば個性が弱くなる

からな。

早速着てみて転移できるか試し、成功。

馴染んでから時間が経ってないから体力の消費が激しいが、時期になれるだろう。  
鏡に映った自分を見て、満足。

姉貴に初めて見せた時は

「…はあ。ま、うん、あんたらしいねw」

と草を付け忘れるまでして賞賛してくれた。

よし。写真とってグループLINEに送ろう。流石にクラスLINEは女子にナルシストと思われたくないからやめるて、男だけの方に送ろうと思う。

送信。

返信が楽しみだ。

お、返信来た。峰田か。

何？ダサいけどなんのアニメキャラのコスプレかだって？

は？嫉妬か？やんのかおい？俺のヒーローコスチューム舐めんなよ？

え？何その反応。皆俺のセンスについてけないのか？

おい緑谷。何故慰める。

というか上鳴、ネタだろ？ってなんだよ。マジだよ。

アンケートを作りました。

これからオリキャラを出すかどうかのアンケートです。

まあ特に深く考えないで本心で答えてください。

あくまで作者も参考にするだけで1番投票数が多かったものの通りに作品を進める訳では無いので。

きつとオリ主が中学時代モテなかったのは彼がオシヤレ過ぎたのか、変人だと思われていたかの2択ですネ。

氏ね!この性悪白髪野郎め!!

恋愛。皆はしたことがあるだろうか。

俺の恋愛は、幼稚園の頃から片想いしていた幼馴染に告白するも、返事を貰う前に親父の転職で転校することになった小学4年生の春の思い出と、普通に振られた6年生の秋の思い出、そして長いこと片想いしてた子に実は彼氏がいた中学校3年生の夏の思い出くらいしかない。

泣きたくなるぜ。しかも中学校からは制服の着用が校則になったため俺の有り余るオシャレセンスを活かせなかった。

が、この高校のヒーロー科なら違う。この学校は授業で使うヒーローコスチュームがあるのだ。

だからそこでイケメンコスチュームを用意すればモテる。

きつとそうに違いない。

俺はそう考えていたが、どうやら違ったらしい。

今日行われるの救助訓練の場所に移動するバスの中、俺がこのカッコイイヒー

ローコスチュームを周りに話した所、

「…ヒーローは目立つことも重要やからね…」

「あはは！カラフルヒーローだ！」

「神出ちゃん。正直ダサイわよ」

と、上から麗日、葉隠、梅雨ちゃんだ。

あ、梅雨ちゃんってのは向こうがそう呼んでくれと頼んで来たからであって、俺が勝手に心の中でだけそう呼んでいるとかいう軽く引かれるようなことではないぞ。

…まああれだ。姉貴とか親父はいつも俺のセンスは悪いと言ってたいたが、どうやら本当に一般人にはついていけないセンスだったらしい。

親父は「俺に似てセンスが良い」って言ってたんだけどなあ。

ちなみに俺が派手な色が好きなのにはちゃんと理由があったりなかったりしたりしなかったりする。

実は俺の個性による転移は、今でこそ安定しているが幼少期は頻繁に個性事故が起こっていた。

例えば転移する時に自分の髪を転移するのを忘れてたしまい数日間坊主になったり。

例えば転移する場所を間違えて地面から数メートルある高さに転移してしまい怪我をしたり。

そんな数ある個性事故の中でも、一際数が多く個人的に気持ちが悪い個性事故があった。

それが「転移する際に自分の色を忘れてしまう」事故である。

これはマジで怖かった。転移したら、元々白かった髪はそのまま変わらなかったが、他の色という色が全部消えていたのだ。肌も完全な白になり、口の中や唇、爪、更には血液まで全部白になった。

そして転移する前の俺がいた場所には俺の形に俺の色が取り残されていた。

取り残されていたといっても一瞬で、すぐに風に飛ばされていなくなったのだが、あれは本当に気持ち悪かった。

まるで自分からたましいだけ抜け出した用な感じだった。

照りつける太陽の光に暖かさを感じない身体は本当に気味が悪かった。

実はこの現象は今でも集中力が切れたり疲労困憊な状態で転移を連発したりすると起きてしまう。

そしてそれ以来俺は、鮮やかで派手な色が好きになった、

ような気がするしそうじゃないかもしれない。というかこの好みはそもその話親父譲りだし。

…何思い出してんだか。あ、別にそうなくてもちゃんと色は戻るよ。

細胞が作り変わるからだろうね。

でもそれだと脳はあまり細胞が作り変えられないから白いままってことになるが、正直今考えると色が変わった程度のなんということもないんだよな。

…灰色の脳細胞(物理)。俺らしいじゃないか。

と、俺が無駄な思考をしているうちにバスが目的地に着いた。雄英は本当に良い人達が多いな。こういう必ずボッチが出てくるイベントでも誰一人として一人にならない。

バス内はとても賑やかだった。

…その後、あんなことが起こるとは知らずに…。

で、着いたはいいが、デカイ。いや、えええ……。流石にデカすぎだろ。どんだけ金持ってたんだよ雄英。え、何？USSJ？

その有り余る金、他に使い道ないの？

金がかかり過ぎているこの雄英高校はこのヒーロー飽和社会の象徴なのかもしれない。

あ、象徴と言えば。ハトが飛んでる。しかも白いやつ。珍しいなー。

平和の象徴という称号をオールマイトに奪われたつてのに全く知らんぷりで空を飛び回るやつらを見ると、何となく平和の象徴だったことにも納得がいくような気がした。

俺も飛びたいなあ。飛べるけど、最近は海ぐらいでしか飛んでない。流石に大っぴらに個性を使ったら注意されるからな。またどこか個性使ってもバレなそうない所探すか。

：っと思を考えてるんだか。

あー、そんなこと考えてたせいで先生の話完全に聞き逃した。あの宇宙服さん何言ってたんだろ。

重要な連絡とかじゃなきゃいいけど。

と、これまた俺が既に過ぎた無駄なことを考えていると、突然相澤先生が

「一かたまりになって動くな!!」

と叫んだ。やべえ。話聞いてなかったから全然意図が分からねえ。

ん？何？敵？えっ。敵が攻めてきた!?

あ、本当だ。なんだあの黒いガス。気持ち悪。は？転移個性？キャラ被ってん

じゃねえか。何？ライバルポジ狙ってんの？俺が白でアイツが黒だから調度いい

？

はあ、落ち着け落ち着け。クールになるんだ。クールダウンだ。

「神出！校長に連らく…」

と、相澤先生が俺に何か伝えようとした時、いきなり身体に衝撃が走った。

「…っ！」

取り敢えず何かあったら転移する癖がある俺は、その「何か」の攻撃が完全に当たる前に空中に転移し避けることに成功した。

そして、何が起こったか確認すると、見えるのは黒いマッチョマンが俺のいた場

所を通過した地点で止まっている光景だった。わぁーお。衝撃的。

あ、目が合っ…ッ!!

完全に目がイッちゃってる黒筋肉と目が合った瞬間、黒筋肉が俺の視界から消えた。個性上、動体視力にはかなり自信があったにも関わらずだ。

何をしたか分からないが、取り敢えず癖で考えるよりも先に転移した。

そしてその選択は正しかった。黒筋肉はまた俺のいた場所を通過して停止していた。…あの速さはヤバイ。

っと、考えてる場合じゃねえ!

また目が合う。

**転移! 転移転移転移!!**

遅れて伝わる衝撃波が俺の傷を広げてる気がした。

…恐らく、敵は超加速とかそういう個性。俺の身体に正面からタックルしたのか? あばら骨が完全にイカれてやがる。後、左腕もかなりまずい。骨が折れた。取り敢えず使い物にはならない。

肺の空気が1度抜けたからか知らないが、呼吸がしづらい。俺の個性が呼吸と

かが影響しない個性でよかった。

取り敢えずは敵を視界から外さないようにしながら、転移で攻撃を避け続ける。まったく。突然なんなんだよ。というか何故俺なんだ。普通教師とか狙うんじゃないの？あれか？人質捕まえようとしたら逃げられたパターンか？いや俺捕まえられるでも逃げられるよ？

視界の隅に他の生徒が黒いガスに包まれて行くのを見ながら、それどころじゃねえと転移を連発する。

：体力持つか？俺の個性は基本燃費が良いが、身につけている物が身体に馴染んだものじゃない場合恐ろしく燃費が悪くなる。

このヒーローコスチュームは着始めてまだ1週間ぐらいだ。

ちよっとキツイか？もういっそ脱ぐか？いや、でもそんなことしたら攻撃手段が無くなる。あの筋肉の塊に素手で勝つ自信など無い。

敵の攻撃を回避しながら考える。どこか遠くに転移するか。だがある程度遠くに転移するには、というか視界に入ってる所以外に転移するには集中力と少しの時間が必要だ。

隙が出来ればいけるんだけどなあ。寧ろこっちから攻めるか？

…怖い。でも、攻撃して転移で即逃げるヒットアンドアウェイ(笑)戦法ならあまりリスクは無いかな？

…はあ。このままじゃジリ貧。やるっきゃないか。

俺は、ズキズキと響く傷の痛みを無視して、腰についてるナイフを右手に取り、全力で振り被りながら転移をする。

「ッらあ!!」

声を出して気合いを入れながら敵のアキレス腱を搔っ切る。

硬え…。切れ味抜群特製ナイフでこれか。ガチのバケモンじゃねえか。

…って、えええ!? 回復してる!? はあ!?!?

ちよっ! また来る! 転移!!

…。なんだよあれ。あれか? 個性「バケモノ」とかか?

あながち間違いはなさそうだな。

が、敵の足の怪我を負わせたお陰で少し余裕が出来、何とか相澤先生の所に戻れた。

「先生！どうなってるんですか!？」

よく見たら宇宙服マンも倒れてる。相澤先生は身体中に手が張り付いてる敵と戦ってた。何あれキモっ。

「敵、敵連合と名乗る奴らが攻め込んで来た。オールマイトを殺しに来たらしい。取り敢えずお前は校長に助けを呼んでこい」

と、相澤先生が落ち着きを持って状況説明をしてくれたところで、敵が口を開いた。

「脳無、やめろ。…神出キビトだったか、お前。いいなあ。俺と同じ臭いがする…」

「一緒にすんなこの白髪野郎！俺の髪は生れつきこういう色なんだよ!!という臭いって何だ!?!お前もメリ○トか!?!」

中学校の頃散々白髪といじられたが、誤解しないでほしい。これはそういう髪色だ。

「お前、本当はヒーローなんかなりたくないだろ。黒霧が他のガキ共をワープさせたのを見ても全く動じなかった。脳無と戦ってる時だって、自分の命を確実に守る

ことを考えて逃げて、ヒーロー特有の、なんだ?身を削る戦いを絶対にしなかった。それに、その光の無い目。世界に関心がない目だ:」

白髪が俺の声を無視して続ける。

「ああ:先生の言ってた転移個性がまさかこんな面白いとはなあ:」

お前、敵側こっちがわに興味は無いか?」

:何言ってるんだコイツ。いきなり喋り出して。

取り敢えず、適当に言葉を選んで返していく。

「なあ敵。プルスウルトラって知ってるか?この高校の校訓、というか昔の偉い人が言ってた言葉なんだけどさ。

更に向こうへ、だとよ」

白髪が歪に笑いながら俺の声を聞く。

「おい、神出、何を言っている。早く校長に:」

相澤先生が注意して来るが、無視して続ける。

「例えばアンパ○マン。凄いよなあ:毎回毎回元気を100倍にしてる。インフレもいいところだ。

けどな、俺みたいな奴はそ」

そして俺は、意味深なことを言い出したと見せかけ、絶対にそこで話を中断しないであろう所で個性を発動し、白髪の後ろに転移する。

そして、思いつきり脚を振り上げる。狙うは金的。サポートアイテムで脚力も上がっているし、鉄が仕込まれた、それも先端にギザギザのトゲ状の刃が付いた靴だ。威力は凄いだろいなあ。

いっけえええ!!不意打ち金的蹴り!!!!!!

いつもの如く技名を心の中で叫ぶ。

「…っがああ!」

っち…少しズレたか。勘がいい奴だ。避けようとしたな。確実に潰そうとしたのに、あれじゃあまだ子供を作れる程度だ。

だが、まあ、確実にトゲは刺さっただろうし、金的にも衝撃を走らせることに成功した。それに、外れた部分も尻に当たってる。ちゃんと血だらけだ。痔になってしまえ。

…概ね不意打ちは成功したと言ってたいだろう。

最後に内股猫背になっている白髪野郎の前に転移して、最大限煽ってから逃げる。「だあれが敵の言葉になんかに耳をかすかばアあああか!...! 足りねえ脳味噌で少しは考えてみる!!アアん?できないのかあ??そらあ残念だなあ、敵連合(笑)さん?」

わざわざ脳無だかを止めてまで俺を逃がしてくれてありがとうなああ!...!」いつもより少し言葉が過激だ。仕方ない。アドレナリンがドバドバだもん。というか傷の痛みが俺を乱暴にする。

その際にチラッと相澤先生を見て、「後は頼みました」と言葉に出さずに伝える。きつと伝わったはずだ。顔が引きつってたけど、多分大丈夫だろう。

相澤先生なら脳無とかいう黒筋肉の個性を消せる。

異形の個性は消せるか分からないが、流石に個性の発動無しであの怪力はないだろう。

取り敢えず今は校長に報告だ。俺は転移を発動し、校長室前に移動した。

そしてあの毛並みの良いネズミにことを伝える。

敵が攻め込んで来ましたああ! 転移個性がいます!!後、オールマイイトが狙いら

しいです!!!

だいたいこんなことを伝えた。俺のセリフのビックリマークは使われる度に段々数が増える。覚えててほしい。：何を言ってるんだらうか。

なんか隣にいたガリガリの老人が悔しそうに顔を歪めていたのが印象的だった。取り敢えず、少しでも戦力になる為戦場に戻る：と、見せかけて、空中に転移して皆の様子を伺う。

流石にまたあの黒筋肉と戦うのは嫌だから：じゃなくて、俺が行くことで状況が良くなるようなことが無いか探す目的だ。

：お？上鳴が人質に取られてる？よし。助けに行こう。

落下でたっぷり加速して：

俺式ライダーキック!!

「がああっ!!」

フハハハ。鉄で強化されたライダーキックは痛かろう。

ちなみに俺はあまり痛くない。どういう構造か知らないが、こっちにはあまり衝撃が来ないが、敵側には衝撃が行くようになってるらしい。画期的だね。

取り敢えず上鳴の救出に成功。そして吹っ飛んだ敵に追撃を与える。金的…は、流石にやめとこう。敵の腹、みぞに蹴りを放つ。トゲトゲがいい仕事するんだよな。

「神出さん!!」

「神出!!」

八百万と耳郎が俺の苗字を呼ぶ。良いよ。もっと呼んでくれ。もっと呼んでくれ。というか惚れちゃってもいいよ?

あ、耳郎には上鳴がいるか。…そういえば八百万には轟とかいうイケメンがいたな…。

畜生。この世に救いは無いのか。

「おう。元気か?」

変なこと考えていたら返事が適当になってしまった。

まあいいや。助けたという事実が大切なのだ。これで俺の個性株が爆上がりするだろう。多分きつとメイビー。

「ええ…。神出さん、その左腕、大丈夫ですか?」

だいじよばない。痛い。リカバリーガールのところ行けば良かった。…いや、あ

の人の治療は体力消費するらしいし、個性で体力使用する俺は治療してもらわない方が良いか。

「もう使い物にならないな。けど、俺の個性にはそんなに関係ないから平気だ」

「…そう、ですか。いや、そうでわすね。プロになれば怪我の一つや二つ、関係なく動けるようであればいけませんものね」

八百万はそう言いながら何かを身体から出した。これが創造ってやつか。

「神出さん、じっとしてて下さい。応急処置をしますので」

「分かった」

出したのは板と包帯だった。おお。すっげえ。器用に縛るな。だいぶ痛みがマシになった気がする。

「ありがとう」

「いえいえ」

くう…。可愛い。轟め。羨ましい。

「あ、そうだ。上鳴、今なら通信できる？」

と、耳郎が上鳴に言う。やっぱりこの2人、できちゃってるのか？

…って、通信? ああ…。

「報告なら俺がしといた。上鳴は休んどけ」

流石俺。有能だ。とういかなんで人質が上鳴なんだよ。もつと敵役がいるだろ。なんで巨乳ポニテJKとクーデレボブJKがいるのにウェイ系チャラ男を選ぶんだよ。敵失格だ。まったく。近頃の敵はこれだから…。

「流石…早いね」

流石だって! 嬉しい!

「取り敢えず俺は他にヤバそうな奴らを助けに行く。八百万達は…まあ、判断はまかせろわ」

八百万と耳郎が頷く。上鳴はアホ面のままである。

「じゃ、バイバイ」

…バイバイ。これ、地味に口癖なんだよね。さようならじゃなくて、バイバイ。なんかこう、言いたくなるんだよね。…はい。どうでも良いですね。ああ、緊張するとこういう余計なことを考えちゃうのも俺の癖だな。

そんなことは置いといて。また空中に転移してピンチな仲間を探してるわけだ

が、皆平気そうだった。

：いや、平気なのは生徒で、相澤先生はピンチだった。

うわあ……。あれ、生きてるの？ヤバくね？

だって、ほら。うわつ。腕曲がっちゃ行けない報告に曲がってるし。いや俺も左腕そうだけど。でも先生もつとヤバイし。

相澤先生は黒筋肉の上に乗っかられ、拘束された上で痛めつけられていた。

というか、なにあの肘。ボロボロで筋肉が丸見えになっている。なんとというか、崩れた？と言えば良いのだろうか。めっちゃくちゃ痛そうだ。

正直、助けに行ける自信が無い。体力もそろそろ底をつきそうだし。：そろそろコスチュームを脱いで戦うか。これ以上体力が減ると行動にも制限がかかりそうだし。

取り敢えず、完全に相澤先生に意識が向かっているあの白髪野郎に背後から俺式ライダーキックをプレゼントしよう。黒筋肉は無理でも白モヤシならいける。

そうと決まれば、加速。さっきの敵を蹴っても反動がそんなに無かったから、もうちょっと加速しても平気だな。

…よし。こんくらい。

今だ!!俺式ライダーキック!!!

「…ッグあ!!」

はッ!カエルみたいに鳴きやがって。…って、うわっ!

敵が一瞬で反応し、俺の足を掴んできた。咄嗟に転移するが、俺の靴とその下の足の皮膚が崩れた。

そういう個性か…。痛てえ…。

あ、白髪が俺を睨んでる。何?オコなの?え?なんで?俺何か悪いことした?もしかして金的やられたこと根に持つてるのん?まーったく。器が小さいやっちゃんのう…。

「ッ!神出!何故来た!!」

「いや、先生が死にそうだったんで」

これまた空中に逃げながら答える。

俺は、他人が死のうがどうでもいいが、流石に知り合いが死ぬのはあまり好きではない。それに、「俺の中での安全ライン」は戦いの中でも死守している。俺には

最悪アレがあるしな。

ついでにコスチュームも脱いでおいた。中シャツとかは着てないので、正真正銘パンイチだ。今日は黄色に黒の水玉模様！

「お前、現れる時、空気に割り込んで現れるよなあ……。そうすると、やっぱり風が起きる。それなら、気づくのだって簡単だ……」

どうした白髪。なんでお前そんな冴えてるんだ。馬鹿だったあの白髪はどこに行っただ。もっと頑張って馬鹿やれよ！もっとお前は情けなかったはずだろ!?

「脳無」

白髪がそう言っただけで脳無が俺に攻撃を始めた。何？言葉無くとも意思疎通できちゃうの？黒筋肉と白モヤシでラブラブコンビやってるの？結婚して、どうぞ。

と、馬鹿なことを考えつつ攻撃を躲す。といっても、転移するだけなんだけどね。いやー、コスチューム脱いただけでめっちゃ楽だわ。

ついでに転移する場所をできるだけ白髪の後ろにする。

要するに黒筋肉が俺を殴る時についでに白髪も殴ってくれないかな〜という狙い

だ。

いけ！やっちまえ黒筋肉！

まあ、当然白髪を避けて俺を殴りに来るんだが。

ちなみに白髪は俺式ライダーキックをくらってだいぶダメージを受けたようだが、それでも案外平気そうだ。

おいおい。常人ならトマトのように潰れるぞ？なんで平気なんだよ。

…いや、良く考えれば相澤先生とか黒筋肉に顔面をコンクリりに打ち付けられてるのに生きてるしな。

というかなんでコンクリの方が壊れるんだよ。相澤ヘッドの方が硬いのかよ。

あ、これ、イレイザーヘッドのヘッドと頭の英語訳のヘッドをかけた高度な洒落な。

そんなことを考える余裕がある程度には余裕で避けられる。

教師陣は既に呼んである。それまで時間を稼ぐくらいだったら平気だ。

と、そこで白髪の横に黒いガスが現れた。どうやら「黒霧」というらしい。

…白髪程度なら俺と脳無の高速戦闘についていけないから戦力に入らないが、黒

霧は転移個性だからな。警戒しとかないとな。

と、そこで黒霧が報告を始める。え？何？飯田天哉に逃げられた？あ、そう。それ以前に俺を逃してるけど？

大丈夫でちゅか？ガバ警備先輩？

と、俺が心の中で煽っていたら、黒霧がワープを発動した。

来るか？

俺はそう警戒したが、ワープ先は梅雨ちゃんのところだった。

…って、アイエー!?梅雨ちゃん!?ナンデ梅雨ちゃんナンデー!?

恐らく敵を倒して駆けつけてくれたのだろう。俺と同じだ。が、性悪白髪はその善意を踏みにじる。

いきなり白髪が動いたと思ったら、梅雨ちゃんの頭に手をかけようと…。

「俺を忘れてない!？」

梅雨ちゃんの可愛い顔を崩壊させるわけにはいかない。崩壊の犠牲になるのはいもだけで十分だ。

俺は転移ですぐに駆けつけ白髪を蹴り飛ばす。



…ヒュー。カッコイイ。思わず痺れちまうぜ。もう、あとは任せよ。立ってるだけでキツイ。やっぱり柄にもないことするのは疲れる。どれもこれも敵のせいだ。せいぜい金筋肉にぶっ倒されるんだな!!(小物並感)

俺は最後の力を振り絞り保健室に転移し、そのままおれるように意識を手放した。もうそれただの気絶じゃん。ああ…事前に保健室に来ておいて良かった…。こうして転移す、ることが…できる…か…ら…。

今度こそ本当に、俺は意識を手放した。その顔はどこか安心していらしい。

はあ…。雄英の教育はヤバいって父さん言ってたけど、多分父さんの思ってるヤバさより3倍くらいヤバいわ。

俺はまだ、プルスウルトラなんてしない。

後に神出はこう語る。

「なんでリカバリーガールが若い頃に会えなかったんだ!!

若い頃にちゅーってして欲しかった!!!」



タグに書きちゃったからね。もう引き返せないね。

そろそろ夏休みが終わるぞ。投稿頻度落ちるぞ。

え？何？プルスウルトラしろよって？

すまん。夏課題がまだたんまりあるんだ。そっちにプルスウルトラするから、小説投稿まではプルスウルトラが回らないんだ。課題でプルスウルトラ使いきっちゃうんだ。

皆さんこんにちは。アダンソンです。

神出家のペットです。

早速ですが、僕には個性があります。蜘蛛に個性があるのはかなり珍しいらしいので変に研究とかされたくないから黙っています。

個性は「人並みノーマライゼーション」です。自分で名付けました。名前通り「人並みのこと

きるようになる」個性です。

この個性のお陰で、僕は人並みの知能があり人並みの知識があります。しかも、人並みに力や防御力もあります。

要するに、一般人ができることは全てできます。

言葉を理解することもできるし、実は喋ることもできます。

これもこの個性の名前の由来の一つです。

つまり僕は、人に踏まれても死なないし、人と同じくらいの知能があり、同じ食事を食べても体調を崩さないし、40kg程度の物体なら持ち上げられるし、50mを8秒で走ることができるといいます。

僕の身体が通常の蜘蛛より大きいのは、恐らく人並みの知能、力を扱うためにはある程度の脳の大きさや体格が必要になったからだと思います。

ついでに言いますと、この個性の発動は任意なので、食事の量とかは人並みに取らなくても生きていきます。

流石に居候の身としてあまり我儘を言うことはできないので、食事はパンの欠片や少しの米などを貰って生活しています。

この家で1番恩を感じているのは、やはりキビトさんです。

異常個体の僕を見て、彼が「飼う！」と言ったのは、確か10年くらい前、彼が小学生になりたての頃でした。

それまでまともな食事というものをして来なかったわけですから、それから毎日天国でした。

この恩は必ず返すと心に誓い、彼の脱いだ服を畳んで仕舞ったりと身の回りの世話をしていますが、僕はまだまだ恩を返しきれっていません。

そこである日、試しに彼の学校に潜入し、何か力になれないか探し始めることにしました。

その時彼は中学1年生でした。

そして、彼がとても残念な人であることが分かりました。

例えばバレンタインデー。

彼にチョコを渡そうとしていた女子がいるにも関わらず全校を転移して回り、チョコを渡してくれる女子を探してはアピールしていました。

大人しく教室でじっとしていれば貰えたものを、その女の子が渡そうとして声を

かけようとする瞬間に限って転移をし、すぐにその場から姿を消してしまう勿体ない行為をしていました。

その他にも、彼と友達になりたい人や恋愛感情を持つ人もいるのに、彼は転移ですぐに消えてしまい話しかけることすらできないという事態が起こっていました。服のセンスは皆無。口から出る言葉も適当。歌も絵もダンスも基本はとても上手にできるのに、アレンジの入れ方が異常に下手。

更には興奮すると無意識に転移を連発してしまいゲームのバグのように彼の姿が異様にボヤけて見える現象を起こしてしまうという残念さ。

基本スペックは高いのに、とても残念な人でした。

そこで僕は「天の声」を演じることにしました。

具体的に言うと、天井の照明の裏に張り付いてそこから声を出し、あたかも天からのお告げのように彼にアドバイスを送るというものでした。

その結果は失敗。彼は神など毛ほども信じませんでした。

どこかにスピーカーがあると考え探しだし、僕を見つけてしまい、僕が喋れることを知ってしまいました。

彼に捕まってから、改めてアドバイスを贈るも、成長する気配はなし。

これはもう、彼がそういう星の元に生まれたとしか考えられませんでした。

その後も彼について学校に潜入する生活は続き、ついに彼は卒業、そして雄英高校に入学にました。

彼が入学してからもこの行為は続けましたが、ある日教師に見つかってしまいました。

その教師は謎のロボットを使い僕を捕獲して言いました。確かサポートアイテムと言っていました。

「君を少し見てたけど、知能があるね。操られてるのか、個性があるのか。どちらにせよ、雄英は君の潜入を簡単に許すほど優しくらないのさ」

ネズミ……？君も同類じゃないかと思いつつ、このまま殺されてしまいそうだったので僕は口を開きました。

「プルプル。僕は悪い蜘蛛じゃないよ」

…。反応なし。右目に傷があるポーカーフェイスが僕を見つめる。

「えーと、僕はキビトさんのペットだから、キビトさんに聞いてください」

丸投げします。すみませんキビトさん。

「なるほど。面白いね」

その後ネズミさんがキビトさんに確認を入れた後、僕はネズミさんとお喋りをしました。

：いや、あれは一方的に向こうが喋っていただけだったのかもしれませんが。

分かったことは、ネズミさんが校長だということ、ネズミさんも個性がある動物であること。

ネズミさんに個性を説明したら、「いい個性だね」と言われた。個性が人並みを保証してくれるなんて、ダメ人間には与えられないね、と。

：。僕、学生でもないし働いてないし、就活もしてないからニートなんだよね。もう既にダメ人間かもしれない。

まあ、お手伝いさんポジションだからセーフかな。飼育に手間をかけられていないし。

ネズミさんは、「プロヒーローにも動物をサイドキックにする人もいるのさ。君

もそうなるかい？」と聞いてきたが、首は縦には振られなかった。

役に立てる気がしない。例えば探索とかは、キビトさん、転移でできてしまうし。災害時とかに瓦礫に埋もれた、人の通れない所とかなら活躍できるかもしれないが、結局のところ一般人並の力しかありませんからね、僕。他のヒーローに報告をするので精一杯です。

それに僕は普通の蜘蛛より大きい異常個体ですから、普通の蜘蛛より警戒されてしまいます。これではあまり潜入にむいていませんね。

これぐらいしか役に立てないならキビトさんのサイドキックになる必要がないですし、そもそもキビトさんもフリーのサイドキック希望なんですよね。

せいぜいキビトさんのポケットに入って、敵の隙をついて攻撃とかしかできません。

…というか、僕の攻撃って特殊なんですよね。普通の蜘蛛とは違って糸が出せませんし。まあ、ハエトリグモだから当たり前ですが。

僕は個性で人並みの力がありますが、身体の大きさ、つまりは手の大きさが人並みにはありません。…恐らく個性を使えば人並みの大きさになれますが、利点はな

いのでしません。

…で、ですね。手が小さいと、殴る時に当たる面積も小さくなり、圧力が上がるんですよ。

要するに、針で刺すようなものです。だから、僕が殴っても人並みの威力が出るというよりも、人が殴るのと同じ威力で針を刺す感じになってしまい、刺さってしまいます。

これは顎での攻撃も同じで、人が噛むよりも威力は上がります。攻撃範囲は狭いですが。

だから場合によれば一般人よりは戦えるかもしれませんが、それでも個性のある人に勝てる気はしません。

…要するに、弱いんですよ。僕。というかキビトさんの戦い方が理不尽すぎてついていけません。

…恩返しする方法、色々探そうかな。例えば料理をできるようになるとか。誰か教えてくれませんかね。

いや、「人並み」にはできるんですが。

――

さあみんなさん。この小説の主人公の名は知ってるかい？

正解は神出鬼火都だ。この俺だ!!

で、その主人公にはヒーロー精神の欠片もなかった筈なんだが、あれ不思議。そんなことが嘘のように見えてくる。

この間の敵連合(笑)が雄英高校を攻めて来た時の行動を思い出してみてください。

1、敵の対オールマイト脳無(鬼つよ)と戦い、善戦。相澤先生を守った。その代償に怪我。

2、敵のリーダー(笑)にダメージを負わせつつ、校長に騒動を報告。飯田くんの行動が無駄になったが、早いに越したことはない。これによりたぶん何人か救った。

3、上鳴達の救出。3人助けた。(もし他に助けが必要な人がいたら助けていた)  
4、相澤先生を助けた。その後脳無と白髪相手に戦う。

5、梅雨ちゃんを守った。よく見たら梅雨ちゃん結構可愛かった。

6、その後オールナイトが来るまで粘り、誰1人殺させなかった。代わりに俺は重症。転移で保健室に行つてぶっ倒れる。

7、その後リカババーに応急処置をされ、病院に運ばれる。起きたら皆心配してくれて何人かは俺の寝ているベッドの隣に立ってた。

梅雨ちゃんが泣いてた。可愛かつ…おっと。俺は別にそんな性癖はないぞ？危ない危ない。これではまるで俺が美少女が泣くのを見て興奮する変態みたいじゃないか

…何1人で言い訳してるんだか。あー、ついでに、いつの間にかまた身体から色が抜け落ちてて、全身真っ白状態だった。

医者に、ヘモグロビンが白いの初めて見たと言われた。

…これは、勲章もんですわあ。

どうしてこうなった。

これではまじでヒーローみたいじゃないか。職業ヒーローになりたいだけなのに、なんの得にもならない行為を進んでやるという。大事なことから2回言う

が、まじでヒーローじゃないか。

そして、何故こんなことが起こってしまったか考えた。

「これは…あてられたのか？」

あてられた。教員から生徒まで、ことごとくがヒーロー思考をしている雄英の雰囲気。緑谷達の夢見るヒーローの輝くあの瞳に。

俺のした行動が「当たり前」かのようなあの学校。そしてその行動を「素晴らし」と考えるあの学校に。

…俺としたことが。流行のファッションをあえて3年くらい前のものをとったり、みんながポケモンGOをやっている中1人だけダイヤモンド、パールのパールの方をやっていた俺が。

あの学校色に染められかけている。

えっ…。怖。

俺が行う正義なんか、「コンビニ行く感覚」でできることくらいだと思ってた。

自分より弱い相手を、確実に勝てる相手を、きっちり不意打ちをキメて倒す。そんなサイドキックになるって決めていた。

が、現実には自分がボロボロになるまで戦い皆を守ったわけだ。

…正直に言えば、あの時はまだ「奥の手」を隠していたから俺が死ぬことは確実にはないと思っていた。

が、医者は1パーセントくらいの確率で死ぬかもしれない危機だったそう。

自己犠牲。その言葉が思い浮かび、俺にまわりつく。

…ここで俺には2つ選択肢がある。

1つ目は、雄英色に少し染まり、絶対に自分が死なないように保証できる行為に限り自己犠牲をしたりしてヒーローをする選択肢。

2つ目は、雄英の方針に全力で抗い、俺の信念を突き通すという選択肢。  
どっちがいいか。

…結論から言えば、どちらも選ばない。

いや、なんだそれと言いたいのはわかる。だが聞いて欲しい。雄英色とか嫌だけど、抗うのも大変だろ？

だったらなあなあでいいじゃないか。

そもそも俺には「ヒーローの精神にはならない信念」なんてものは無い。

よく親父は「信念がある奴は強い」と言っていたが、俺にあるのは「絶対に信念を持たないという信念」だ。

人間、信念なんて邪魔なものがあると、何か行動をする時に最初に信念に合っているかどうかの振るいにかけることになる。そんなものは御免だ。

俺の長所は「即実行」だ。転移個性なんだから。何かやりたいことができたら即やるのだ。信念は邪魔でしかない。

ちなみに「即実行」も信念ではない。ただやりたいことをやった結果、そうなっただけだ。

そもそも信念なんて存在事態がナンセンスだ。今ある感情が未来永劫続く保証なんてないし、正しいかすら分からないのだから。少なくとも、明日の俺も昨日の俺も、今の俺からしたら他人だ。

そんな他人に信念なんてものを押し付ける気はないのだ。

要するに。俺はやりたいことをやる。理由なんて後付けでいい。

それに、俺は進んで人を見捨てるような人間じゃない。例えばおばあちゃんが電車で立ってて、俺が座席に座っていたら、自分の機嫌が良ければ席を譲る。

…とは言っても電車なんて修学旅行でしか乗ったことないけど。個性あるからいいらないし。

…まあ、あれだ。道端でたまたま死にかけてる人がいて、その隣にボタンがあつて、そのボタンを押したらその人を助けられるとする。それなら俺は助ける。

その程度には俺にも善性がある。

だから、いつもの如く、コンビニ感覚で人助けをしたのだ。

転移して殴ったり蹴ったりするだけ。簡単なお仕事。それだけで梅雨ちゃんも上鳴も相澤先生も助けられる。だから助けた。怪我は人を庇ったとかじゃなくて、単純に自分のミス。

ほら。それらしい理由ができた。

そもそも理由なんて言葉事態おかしなものなのだ。もう既に終わったことなのに、「何故そうなったか」を求めろ。

要するに、理由なんてものは後から考えたものであり、後付けなのだ。

だから俺は過去たにの俺んに理由を押し付けて、適当にやりたいこととして生きていけばいいんだ。

俺はそう、1000文字程度に渡る理由を考え、個性訓練を始める。今日はグアムに行く予定だ。

∴。あくまで訓練だよ？旅行とか、遊びじゃないよ？え？何？医者に外出禁止されてるだろって？

∴ほら、あれだよ。その時になったら適当に理由を考えればいいんだよ。取り敢えずは行動をしようぜ。

┆理由なんて後付けでいい。

---

言い忘れてましたが、感想はどしどししてください。励みになります。

基本的に返信はしないスタイルで行こうと思いますが、気分返信するかもしれません。

後、質問形式の感想にはキッチリバツコリ答えて行く予定です。

さらにさらに。誤字報告待ってます。こっちは本当に助かりますんで。是非とも  
お願いします。

# ヒーローとは一種の狂人である

---

著者 はせがわわわわ

発行日 2020年5月21日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-  
<https://syosetu.org/novel/199517/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。

---